

現代文問題集④

【記述式問題特化篇・第二】

滯日莊

目次

【第一問】 地層としての時間 — 史実を越えて生きる記憶	… 2 ページ
【第二問】 地図に描けない場所 — 空間と人のあいだ	… 10 ページ
【第三問】 光年の沈黙 — 宇宙が人間に問いかけるもの	… 18 ページ
【第四問】 光ファイバーと人間の距離感	
— “見えない光” がつなぐ世界の深層	… 28 ページ
【第五問】 手触りの哲学 — 技術時代における身体感覚	… 39 ページ
おわりに	… 51 ページ

【第一問】地層としての時間 ― 史実を越えて生きる記憶

歴史を語るとき、私たちはしばしば「出来事の順序」を思い浮かべる。年号や事件の因果を整理し、時間の線上に人間の営みを並べる。だがその「時間」は、果たして一本の線で描けるものだろうか。むしろ、時間とは幾重にも堆積した地層であり、私たちはその層の間を生きているのではないか――そう考えるとき、歴史の見え方はがらりと変わる。

たとえば、奈良の東大寺大仏の再建。火災や戦乱によって失われ、そのたびに人々は再び造立を志した。その巨大な仏像を支えたのは、宗教的信仰だけではなく、「かつてあったものを取り戻したい」という記憶の力だったろう。だが、再建のたびに用いられた技法や材料、設計思想は異なっている。そこに立ち上がった仏は、同じ姿を模していながら、もはや「かつてのそれ」ではない。つまり、人間は記憶を通して過去を再現しようとしながら、同時にその行為によって過去を書き換えているのである。

歴史とは、単なる事実の連なりではない。そこには、「いま」を生きる者のまなざしが、絶えず投影されている。江戸時代の古文書を読み解く研究者が現代語訳を試みるとき、その翻訳の語彙選択には、現代の感性や価値観が反映される。記録の保存とは、記録の変形でもある。すなわち、過去を「残す」とは、過去を「いま」に書き直すことにほかならないのだ。

地層の比喻でいえば、最も古い層は、後から積み重ねられた土によって覆われ、見えにくくなる。しかし、掘り返すとき、私たちは必ず表層を通らなければならぬ。どんなに深い歴史を語ろうとしても、それを掘る手は現代に属している。したがって、私たちは過去を純粹なたちでは掴めない。私たちが触れるのは、つねに「過去と現在のあわい」に生成する“いまの過去”なのである。

たとえば城跡の石垣を見つめるとき、その崩れや欠けは単なる劣化ではなく、時間が刻んだ模様である。あるいは古道のわずかな湾曲に、かつての流通や地形の痕

跡を読み取ることができる。物質の形が変わることは、時間の証言である。地層が過去を包み込みながら新たな層をつくるように、人間の社会や記憶もまた、変化を通して保存されている。

それゆえ、歴史を「過去の出来事の記録」としてのみ捉えると、そこからは“生きた時間”が抜け落ちる。歴史とは「過去に起こったこと」ではなく、「過去をどう生き継ぐか」という現在の営みなのである。

この視点に立てば、復元や保存といった行為も、単なる再現ではなく、過去と現在が共鳴する場として理解できる。たとえば被災地の復興計画で議論される「元の街並みを取り戻すべきか、それとも新しくすべきか」という問題も、どちらが正しいかではなく、過去と現在の時間軸をどう接続するかという問いに置き換えられる。そこでは「残す」とことと「変える」ことが拮抗しながら、ひとつの時間の層をつくっていく。

この「時間の層」を意識することは、私たちの存在理解にもつながる。人間とは、個体として独立しているように見えて、実際には多くの他者と過去の出来事に支えられている。身体もまた、無数の遺伝的記憶を継承している。つまり、私たちはそれ自体がひとつの「地層」なのだ。私の中に流れる言葉、価値観、文化的背景――それらは私自身のものではなく、時代の堆積物である。それを自覚するとき、私たちは初めて「自分を越えて生きる」可能性に触れる。

歴史の中で“時間を生きる”とは、ただ過去を知ることではなく、過去と現在の交錯を感じ取ることだ。古代の器を手にとるとき、そこに触れるのは物質ではなく、かつてその器を作った手の温度である。つまり、過去は「在ったもの」ではなく、「いまも触れ得るもの」として私たちの中に息づいている。

そう考えると、時間とは流れていくものではなく、重なり合っていくものだと言える。地層のように、私たちの中には数え切れない過去の時間が沈殿している。そして、その沈殿をどう見つめるかが、私たちの未来の形を決めるのだ。

「地層としての時間」という比喩は、単なる象徴ではなく、私たちの生き方その

ものである。表層を削れば奥に過去があり、過去を掘ればそこに新しい現在が現れる。その往復の中で、人間は歴史をつくり続ける。時間は、過ぎ去るものではなく、積もるものなのである。

設問

問一

筆者は「過去を残すこと」について、どのような考えを述べているか。本文全体の文脈をふまえ、「変化」と「保存」という二語を用いて80字程度で説明せよ。

問二

本文では「時間」を「地層」にたとえている。この比喩が表している時間観の特徴を、**人間の歴史理解との関係**に着目して80字程度で述べよ。

問三

筆者は、東大寺大仏の再建や城跡の石垣などの具体例を挙げて論を展開している。これらの具体例は、筆者の主張の中でどのような役割を果たしているか。60字程度で説明せよ。

問四

本文の考え方をふまえて、現代社会における「デジタルアーカイブ」の意義を論じよ。筆者の主張に照らして、**あなた自身の見解を含めて**60字程度で述べよ。

問五

本文末尾で筆者は「時間は、過ぎ去るものではなく、積もるものである」と述べている。この一文が、本文全体の主張の中で果たす効果を、**語りの構造との関係**から80字程度で説明せよ。

解答・解説

問一

模範解答

過去を残すとは、固定的に保存することではなく、変化を通じて生き続けさせる営みである。筆者は、保存と変化が対立するのではなく、むしろ変化の中にこそ真の保存があると考えている。

別解①

筆者は、保存を「変化の拒絶」ではなく「変化を受け入れる形の継承」と捉えている。過去は再現されるたびに書き換えられ、その変容の連なりによってのみ生きた記憶として残ると主張する。

別解②

筆者にとって、保存とは過去を閉じ込める行為ではなく、変化を含みながら時間の層を築く行為である。変化することこそが、記憶を今に呼び起こす最も自然な保存の形とされている。

自己採点チェック

- ・ 「保存」と「変化」を対立でなく共存として扱っているか。
- ・ 「保存⇨変化を含む営み」という構造を明示しているか。
- ・ 過去を「生かす」「現在化する」といった能動的語が使っているか。

問二

模範解答

「地層」の比喩は、過去と現在が断絶せず重なり続ける時間観を示す。筆者は、人間の歴史理解を線的ではなく層的と捉え、掘り返す行為そのものが過去を新たに生成することを表している。

別解①

地層は、過去が埋もれながらも現代に影響を与え続ける構造を象徴する。筆者は、

歴史とは積み重なった記憶を掘り起こす過程であり、その都度「新しい過去」が生まれると示している。

別解②

地層という比喻により、時間は直線的に流れるものではなく、複層的に沈殿するものとして描かれる。人はその層を掘り返すことで、過去を再構成し、現在の中に歴史を生かしている。

自己採点チェック

- ・ 「地層」重なり／掘り返す」などの構造を正確に言語化しているか。
- ・ 「線的でない」「複層的」など時間観の特徴を明示しているか。
- ・ 歴史理解との関係性（再構成・生成など）を明確にしているか。

問三

模範解答

抽象的な時間観念を、具体的な「再建」や「風化」の事例によって可視化することで、変化を通じた保存という主張を読者に実感させる役割を担っている。

別解①

理論だけでは伝わりにくい「過去が現在に生きる」という主張を、具体例を通して体感的に示すことで、比喩的論理を現実根づかせている。

別解②

筆者は、具体的事例を用いて、時間の層が物質や場所に表れることを示し、抽象的概念である「生きた記憶」を具体化している。

自己採点チェック

- ・ 具体例が抽象主張を「可視化・具体化」していると述べたか。
- ・ 「再建」「風化」「保存」など本文の例を適度に引けているか。
- ・ 単なる例示でなく「論理補強・実感化の機能」を示したか。

問四

模範解答

デジタルアーカイブは、情報を固定的に保存する装置ではなく、社会が記憶を更新する場として意義を持つ。データは再利用や改変を通して新たな文脈を生み、筆者の言う「変化を含む保存」を体現している。

別解①

筆者の立場から見れば、デジタルアーカイブは「過去を変えずに残す」技術ではなく、「過去を今に語り直す」手段である。利用や再編集を通じて、時間の層が再編され、記憶が生き続ける点に意義がある。

別解②

デジタルアーカイブは、記録を半永久的に残すことで時間の堆積を可視化しつつ、同時に利用者による再構成を可能にする。筆者の主張に即せば、それは過去と現在を結ぶ動的な記憶装置である。

自己採点チェック

- ・ 「保存」概念を本文の思想に接続しているか。
- ・ 「固定ではなく更新／生成としての保存」を述べているか。
- ・ 自分の視点を本文の主張と矛盾しない範囲で含めているか。

問五

模範解答

本文全体を貫く「地層としての時間」という比喻を総括し、論の抽象的展開を読者の感覚に落とし込む役割を果たしている。主張の核心を端的に再定義することで、思索を感覚に還元する効果をもつ。

別解①

終結部でこの一文を置くことで、筆者は抽象的議論を詩的断言に収束させ、読者の印象に強く残る形で「変化と保存の共存」というテーマを定着させている。

別解②

この一文は、全体を通して積み重ねられた論理の象徴的まとめとして機能し、比喩的構造を実体感に転換させることで、時間を“生きたもの”として再確認させている。

自己採点チェック

- ・ 最終文が「比喩の再定義」「主張の定着」どちらに働いているか説明したか。
- ・ 「構造上の位置」「読者への効果」を明確に述べているか。
- ・ 感覚的／詩的效果に言及できているか。

◆ 全体総括

この文章は、歴史や記憶を“生きた時間”として捉え直す思想的論説である。筆者は、過去を固定的に保存するのではなく、変化を通して現在に生かすことを「真の保存」と呼ぶ。時間を「地層」に喩えることで、過去と現在が重なり続ける構造を明らかにし、歴史を「線」ではなく「層」として描く視座を提示している。

読解上の要は、比喩的構造と論理展開の関係を掴むことにある。抽象的主張を具体例で補強する手法や、終結部の詩的断言など、論説文としての構成意識も高い。本問群を通じて、読者は「時間」「記憶」「保存」といった概念を再定義し、思考の層を掘り下げる経験を得るだろう。

【第二問】地図に描けない場所 ― 空間と人のあいだ

私たちは、世界を理解するために地図を描く。そこには山や川、都市や道路が線と記号で示され、空間が秩序立てられる。しかし、地図の上に描かれない場所がある。いや、描けないと言うべきかもしれない。たとえば、誰かが一日を過ごした公園のベンチ、通学路の角に差し込む光、あるいは災害で失われた家々の記憶――それらは「地理情報」として存在しないが、人の生を形づくる空間の一部である。

地図は、客観的な空間を表すことを目的としている。緯度や経度に基づく測量、航空写真、衛星データ。これらは「正確さ」の名のもとに、空間を数量化し、均質化する。しかし、人が生きる空間は、必ずしも均質ではない。そこには「意味の濃淡」がある。たとえば、地図上ではただの線にすぎない通りが、ある人にとっては故郷の象徴であり、また別の人にとっては痛みの記憶を呼び起こす場である。地図は、場所の“意味”を記述することができない。

人間の空間経験は、単なる位置情報の集合ではなく、感情や記憶、語りと結びついた出来事の層である。ある民俗学者は、土地の歴史を調べるとき、まず地図ではなく人々の語りを聞くといい。地名や方言の中に、そこに生きた人々の関係と出来事が染み込んでいるからだ。たとえば、北海道の「琴似川」「発寒原」といった地名には、アイヌ語の由来が残っている。地図が線で区切る以前に、人々の声が土地を形づくっていたのである。

このような「語りの地理学」は、近代的地図の成立とともに後景に退いた。国家の行政単位や測量技術が発展するにつれて、空間は「支配と管理の対象」となっていた。地図は権力の道具であり、国境を引くための装置でもある。たとえば、16世紀のアジアにおける植民地支配では、線を引くことがそのまま領土の主張となった。地図上に引かれた一本の線が、民族や文化を分断し、人々の記憶の流れを断ち切ったことも少なくない。

それでも、人間はその線の“向こう側”を想像し続けてきた。見えない境界を越

え、名前のない土地に物語を紡ぐ——その営みこそが、人間の想像力の源泉である。

現代の地理学や社会学では、「場所の喪失 (place loss)」という概念が語られる。高度成長期の都市開発、ダム建設、災害復興——そのいずれも、地図上では「整備」や「更新」として描かれるが、そこに生きた人々の時間や感情は、しばしば切り捨てられてしまう。たとえば、湖底に沈んだ村は、地図上から消えるが、そこに暮らした人々にとっては、いまでも心に残る「帰れぬ場所」である。失われた場所をどう記憶するか。これもまた、「地図に描けない空間」の一部である。

だが、「地図に描けない」からといって、それが存在しないわけではない。むしろ、描けないものこそが、私たちの世界理解を深める。地図が可視化するのは空間の構造だが、人間が感じ取るのは空間の“関係”である。家と道の間、街と山のあわい——その「間」にこそ、人間の生活世界が息づく。哲学者メルロ・ポンティは、身体が空間の中に「投げ込まれている」と述べたが、まさにその身体的経験が、空間を単なる“座標”から“場”へと変えるのだ。

では、私たちはどのようにすれば「描けない場所」を見つめ直すことができるのか。ひとつの手がかりは、地図の“外側”にある情報を読み解くことだ。たとえば、SNS上に投稿される風景写真や日常の記録は、地理的データではなく、感情の記憶を地図化しているとも言える。近年「感情地図 (emotional map)」という試みもあり、人々が感じた幸福や不安を地図上に可視化する研究が進んでいる。そこでは、地図が単なる客観的図ではなく、「人が生きた痕跡」を描く媒体となる。

だが、それでもなお地図の限界は残る。データは記録できても、「意味」を保持することはできない。場所の意味は、そこに立つ人間のまなざしによって変化するからだ。たとえば、同じ風景を見ても、観光客と地元の人、あるいは避難民と開発者では、まったく異なる意味を感じ取るだろう。したがって、地図はどこまでいっても「部分的な真実」にすぎない。それでも人間は、そこに何かを描かずにはいられない。地図を描くことは、自分の世界を確かめる行為でもあるのだ。

このように考えると、「地図に描けない場所」とは、単に未知の領域ではなく、「人

間がいまも描き続けている空間」と言えるかもしれない。私たちは線を引き、名を与え、物語を語ることで、世界を少しずつ形づくってきた。その営みがある限り、地図は未完であり続ける。

地図とは、完成しない約束のようなものだ。描けないものがあるからこそ、描こうとする。見えないものがあるからこそ、人は想像する。人間が世界を理解するのは、世界のすべてを知ることではなく、「まだ描かれていない部分」と共に生きることなのだ。

設問

問一

筆者は、地図が描けない「場所」の存在についてどのような考えを述べているか。
本文全体の議論をふまえ、「意味」と「経験」という語を必ず用い、80字程度で説明せよ。

問二

本文で示される「境界」「線」「外側」といった語は、単なる地理的概念を超えて象徴的に用いられている。筆者がこれらの語に込めた象徴的意味を、人間の想像力との関係に着目して90字程度で述べよ。

問三

筆者は、地図の成立過程・権力作用・失われた村の例など複数の具体例を提示している。これらは筆者の主張の中でどのような役割を果たしているか、70字程度で説明せよ。

問四

本文の議論をふまえて、あなた自身の身近な経験に基づき、「地図に描けない場所とはどのような場所か」を、具体例を交えながら100字程度で説明せよ。

※本文の主張を踏まえつつ、自身の考察も必ず含めること。

問五

本文末尾の「完成しない約束」という表現は、筆者の空間観を象徴している。この比喩的表現が本文全体に対してどのような効果を持つか、構成の終結部としての意義に着目して90字程度で述べよ。

解答・解説

問一

模範解答

筆者は、地図に描けない場所とは、空間が人の経験や記憶によって意味づけられる領域であり、数値化や均質化では捉えられないと述べる。場所は意味と経験の重なりとして存在すると考えている。

別解①

筆者は、場所の実体は座標ではなく人の経験が生む意味にあるとする。地図は物理的構造しか示せず、経験が刻む固有の厚みは捉えられないため、描けない場所が生まれると述べている。

別解②

筆者は、地図の限界は空間の意味が経験から立ち上がる点にあると指摘する。地図は位置のみを示すが、人が生きた関係や感情は描けず、そこに「描けない場所」が成立すると述べている。

自己採点チェック

- ・ 「意味」と「経験」を必ず含めて説明できているか
- ・ 地図Ⅱ客観／経験Ⅱ主観の対比を曖昧にせず書けたか
- ・ 「描けない理由」を“情報の欠落”ではなく“意味の側の性質”から述べられたか

問二

模範解答

これらの語は、世界の区切りが固定的でなく、人間の想像力によって越えられ再構成される領域を象徴する。筆者は、空間を線で確定する行為を超え、境界の向こうを思い描く力が場所を創造すると述べている。

別解①

「境界」と「線」は支配や区分の象徴であり、同時に人がその外側を想像する契機でもある。筆者は、想像力によって固定的な区分が揺らぎ、描けない場所への接近が可能になると示している。

別解②

これらの語は、空間を限定する枠と、その枠を越えて新たな意味を読み込む想像の働きを象徴する。筆者は、人の想像力が線の外側を物語化し、場所の可能性を広げると述べている。

自己採点チェック

- ・ 境界Ⅱ制限／越境Ⅱ想像力という二項を明確に扱えたか
- ・ 地理概念ではなく象徴的比喻として説明できているか
- ・ 「線を越える」「外側を思い描く」など動的表現が使えているか
- ・ 想像力が“場所を創造する働き”として機能する点を押さえたか

問三

模範解答

抽象的な空間論を、権力作用や喪失の事例を通して具体化し、地図に描けない場所が現実存在することを可視化して、筆者の主張を体感的に補強する役割を果たしている。

別解①

筆者は、地図の限界を示す複数の事例を提示し、抽象的議論を生活世界へ接続している。具体例により、空間の意味が記録を超えて成立する点を読者に理解させている。

別解②

これらの事例は、地図が記せない経験的空間の存在を示し、筆者の抽象的主張を現実の問題として立ち上げる役割を担う。概念を具体性へ橋渡ししている。

自己採点チェック

- ・ 抽象論を具体化する機能を述べているか
- ・ 「権力」「喪失」の事例が主張を補強する点に触れているか
- ・ 例示Ⅱ単なる紹介ではなく、論理の推進力として描けたか

問四

模範解答

私にとって地図に描けない場所とは、日々の経験や関係の記憶が積もった領域である。通学路の角の光景や友人と語った公園の空気など、座標では表せない意味が生まれる場所があり、そこに生活世界の厚みが宿ると感じている。

別解①

私が考える描けない場所とは、物理的形状ではなく経験の重なりによって形づくられる空間である。震災後に訪れた町の静けさや、祖父母の家のおいなど、地図に残らない感覚が私に固有の場所を構成すると考える。

別解②

地図に描けない場所とは、出来事や感情が意味を与え続ける領域だと考える。かつて帰り道で立ち止まった坂道や、悩みを抱えて歩いた夜の街並みなど、経験が風景を変え、他人には見えない場所として残る。

自己採点チェック

- ・ 自分の具体的経験を含めて書いたか
- ・ 本文の主張（意味は経験から生まれる）と矛盾していないか
- ・ “座標では捉えられない”という核心に触れたか
- ・ 感覚・記憶・関係などの語をうまく用いて厚みを出せたか

問五

模範解答

この表現は、地図を永遠に未完の営みとして提示し、本文全体の「描けなさ」の思

想を象徴的に締めくくる役割をもつ。完結を拒む語りによって、空間理解が開かれた過程であることを印象づけている。

別解①

比喩的終結としてこの表現は、地図が世界の全てを捉えられないという主張を詩的に凝縮し、読者に探究の継続を促す。未完性を肯定する姿勢を強調し、本文の論旨を余韻として残す効果を持つ。

別解②

この一文は、地図という装置を固定的な成果ではなく生成し続ける過程として再定義し、本文全体の思索を象徴的にまとめている。終結部に置くことで、空間理解の開かれた構造が鮮明になる。

自己採点チェック

- ・ 「未完」「生成」「開かれた構造」など本文核心語に触れたか
- ・ 終結部の効果（締めくくり／余韻／構造的再定義）を述べたか
- ・ 比喩の象徴性を具体的に説明できたか

◆全体総括

本章は、地図という身近な装置を手がかりに、空間の表象と人間の経験の間に潜むズレを読み解く論説文である。筆者は、地図が座標的・構造的な空間を可視化する一方で、人間の感情や記憶、関係性によって立ち上がる「意味の空間」を表しえないという問題を論じる。そのため、地図の線や境界は、単なる地理記号ではなく、人間の想像力が越境し続ける契機として象徴化されている。

本文は、地図の成立過程や権力作用、失われた村の例などを用いて、抽象的主張を現実根づかせ、最後に「完成しない約束」という比喩を置くことで、空間理解を未完の営みとして提示する。読者は、空間が単なる物理座標ではなく、経験と意味の堆積によって生成される場であることに気づくとともに、自らの生活世界の厚みを新たに捉え直すことが求められる。

【第三問】光年の沈黙 ― 宇宙が人間に問いかけるもの

宇宙について語ろうとするとき、私たちはまず「音のない世界」に直面する。真空中には空気の振動が伝わらないため、どれほど巨大な爆発であれ、宇宙空間では音を発しない。超新星爆発――恒星が生涯の最期に達し、保持してきた核融合の均衡が崩壊し、一挙に崩れ落ちて莫大なエネルギーと元素を吐き出す現象――でさえ、絶対的な沈黙のうちに起こる。どれほど明るく燃え上がる炎も、どれほど高温のプラズマが生じてても、宇宙そのものは沈黙を破らない。私たちの耳は、決してその“音”を直接に聞くことはない。しかし、沈黙だからこそ、人間はそこに意味を探し求める。音がないという事実が、むしろ世界を読み解くための別の感覚――可視光、赤外線、電波、重力波――を差し出してくる。宇宙は無言でありながら、無情報ではないのだ。むしろ沈黙のなかに、膨大な“兆し”が散りばめられている。

重力波と呼ばれる空間そのものの微細な歪みは、宇宙の出来事を“振動”として地球にもたらす。これは物質の揺れではなく、空間そのものの形が変形する現象だ。二つのブラックホールが衝突し、渦を巻いて合体する際に生じるその波は、地球に届くところには原子核よりも小さい揺れにまで縮んでいる。それを測定する装置――LIGO や KAGRA――がその痕跡をとらえたとき、私たちは「音のない出来事が確かに起こった」という確信を得る。しかし、その確信は見たことも聞いたこともない、まるで異質な世界への窓のように開かれる。沈黙の背景で世界は絶えず動き続けているが、私たちはその一端をかるうじて感じ取るだけである。

このように宇宙は、声を発しない。だが沈黙のまま無関係でいるわけではない。星の死が撒き散らした元素は、やがて他の星々へと取り込まれ、惑星へと凝縮し、生命の構成要素となる。鉄やカルシウムといった人体の主要元素の多くが、かつては恒星の内部で“鍛えられ”、超新星の爆発とともに宇宙空間へと放出されたと言われる。つまり宇宙の沈黙は、遠く離れた現象が私たちの存在にまで浸透しているという、巨大な連続性を示している。私たちは、宇宙の沈黙の産物であり、その余

白に生まれた存在でもあるのだ。

しかし、こうした事実をどれほど積み重ねても、人間は宇宙を「理解した」と言い切ることができない。科学が進歩しても、理解の中心には常に“欠け”が存在する。観測できるのは、宇宙のほんの一部にすぎない。たとえば、宇宙全体の質量エネルギーの約95%が、ダークマターとダークエネルギーと呼ばれる正体不明の存在で占められていると言われる。重力の振る舞いからその存在が推測されるが、いまだに“見る”ことはできない。観測技術が高度化しても、沈黙の領域はむしろ広がっていくようにすら思える。

私たちはなぜ、沈黙の宇宙を前にしてなお、理解しようとするのだろうか。理論物理学者のミチオ・カクは「宇宙に関する問いが尽きないこそが、人間を人間たらしめている」と述べた。沈黙は無意味ではなく、人間に「問いを生成させる装置」として働く。宇宙の答えは返ってこない。だが答えが返ってこないからこそ、人間は問い続け、仮説を立て、物語を紡ぎ、科学を築く。沈黙は、問いを生むための土壌である。

人類は星々をただの光点として眺めていたわけではない。星座を描き、そこに神話を読み込み、祖先の魂を見、季節の巡りを重ねてきた。文化人類学によれば、星は多くの文明で“語りの起点”として機能してきたという。北極星が航海の道しるべとなり、天の川が死者の道とされたように、人々は沈黙から意味を抽出し、世界観として定着させてきた。宇宙を理解するとは、科学と物語の双方を通して、沈黙の彼方に構造を見出すことであつた。

翻って考えると、宇宙は人間に対して一度も“語って”くれたことがない。語るのは常に私たちの側であり、宇宙の沈黙はそれを促す背景として存在する。科学的観測は沈黙からパターンを読み取る行為であり、哲学は沈黙に問いを投げ返す行為であり、宗教は沈黙の奥に意味を探す行為である。沈黙は、それらすべての起点となる。

宇宙の時間スケールは、人間の人生とは比較にならないほど巨大である。恒星の

生成が数百万年、銀河の変形が数億年、宇宙の膨張は一三八億年の単位で進む。光年という距離単位は、光が一年間に進む距離を示すが、それは「距離」を表す言葉であると同時に、「時間の厚み」を示す言葉でもある。それほど長い時間軸の上では、人間の経験や歴史はあまりにも短い瞬きにすぎない。私たち自身が「星の残骸」を材料に作られていることを考えれば、人間の存在は宇宙の流れの一時的な現象に思える。しかし、同時にその“一瞬”に人間は意味を求め、世界を解釈し、時間を紡いでいく。宇宙の巨大さは、人間の存在の儚さとともに、その精神の強靱さをも浮かび上がらせる。

宇宙論の発展は、同時に人間の自己理解の変容でもあった。地球中心説が覆され、太陽中心説が広まり、銀河の存在が明らかになり、やがて宇宙が膨張していることが発見された。人間はそのたびに、自らの位置の“中心”を失い続けてきた。しかし、中心を失うたびに、人間の想像力はより大きな世界へと開かれていった。宇宙は、人間の傲慢さを打ち砕くと同時に、想像力の可能性を押し広げる存在でもある。

近年、系外惑星の発見は急速に進んでいる。観測方法として主流なのが「トランジット法」と呼ばれるものだ。これは、惑星が恒星の前を通過するときに、恒星の光がわずかに減光することを検出し、惑星の存在を推測する方法である。直接見ることはできなくても、減光という“影”から世界の姿を読み解く。これは、沈黙と不可視性を前提とした発見の方法であり、人間がどれほど間接的な手がかりからでも意味を掘り起こす生き物であるかを示している。

こう考えると、宇宙を理解するとは、測定と解釈の両輪を回す営みにほかならない。測定によって物理的データを得る。しかし、データだけでは沈黙は破れない。そこに意味を与えるのは人間である。仮説を立て、物語を編み、世界を構築する。科学が扱うのは法則の世界であるが、人間が生きているのは物語の世界である。その両者が交差する場所に、宇宙をめぐる理解の可能性が生まれる。

宇宙の沈黙は、人間に何も語らない。しかし、それが人間の思考を沈黙させるわけではない。むしろ沈黙は、人間を語らせ、考えさせ、問い続けさせる。宇宙は答

えを与えないが、問いのきっかけを無数に差し出している。そして問いこそが、人間が世界に関わる唯一の方法である。答えが得られないことに失望する必要はない。答えなき沈黙こそ、人間の精神を深める余白であるからだ。

宇宙の深淵を見つめることは、人間自身の深淵をのぞき込むことでもある。自分がどこから来たのか、どこへ向かうのか、いかに生きるべきか——これらの問いに対して宇宙は沈黙を守る。しかし、沈黙の中で思考することは許されている。いや、むしろ沈黙はそのために存在しているかのようだ。沈黙は人間の精神を孤立させるのではなく、世界との深い連続性を教える。宇宙は遠く、冷たく、理解できない。しかしその沈黙は、私たちが問いをつくり、意味を紡ぎ、世界と関わることを促す“根源的な呼びかけ”でもあるのだ。

設問

問一 (120 字程度)

本文で述べられる「宇宙の沈黙」が、人間の思考や営為にどのような作用を及ぼすと筆者は考えているか。本文の内容に即して説明せよ。

問二 (120 字程度)

本文は、重力波・ダークマター・トランジット法などを取り上げながら、宇宙観測の本質的困難と人間の応答の特徴を示している。これらの事例を踏まえ、筆者が示す「理解とは測定と解釈の両輪である」という主張の理由を簡潔に述べよ。

問三 (140 字程度)

本文では「中心を失い続けてきた」という歴史が人間の想像力を広げたと述べられる。この主張が成立する背景を、本文の文脈に即して説明し、人間の自己理解の変容との関係を論じよ。

問四 (100 字程度)

本文は、人間が宇宙の沈黙に対して「問い続ける存在」であることに価値を見いだしている。筆者がその価値を強調する理由を、宇宙の時間スケールや観測の限界に言及しつつ論じよ。

問五 (200 字程度)

本文では、「宇宙は答えを与えないが、問いのきっかけを無数に差し出す」と述べられている。この筆者の考えが示す「人間と宇宙の関わりの根源的な構造」を、本文の議論全体を参照しつつ説明せよ。

解答・解説

問一

模範解答

宇宙の沈黙は、観測可能な情報が豊富であるにもかかわらず、人間の感覚に直接は届かないという隔たりを示す一方、その沈黙を前にした人間が意味や物語を付与しようとする営みを促し、理解の限界と想像の働きの双方を照らし出す契機となっている。

別解例①

宇宙の沈黙は、物理現象が確かに存在していても人間の知覚がそのまま受け取れないという断絶を示しつつ、その静けさを前にした人間が自らの言語や物語によって世界を補い理解しようとする姿勢を明らかにし、思考の射程を広げさせる契機となる。

別解例②

宇宙の沈黙は、人間にとって把握しきれない規模の現象が進行しながらも直接的な手がかりを残さない点で理解の制約を示すが、その沈黙を埋めるように人間が観測・推論・物語化を通して意味を見出そうとする働きを促し、認識の可能性を逆にくる働きを持つ。

自己採点チェック

- ・ 宇宙が「答えない」ことを前提に書いているか
- ・ 人間側が「問い・思索・解釈」を行う点を示したか
- ・ 消極的でなく「促す／契機となる」ニュアンスが明確か

問二

模範解答

宇宙の出来事は人間の時間感覚とは桁違いの長さで進むため、観測される現象は常に膨大な時間を経た「結果」に過ぎず、私たちは直接の現在ではなく歴史の断片を

読み解いているに等しい。この時間的隔たりが、宇宙理解には推論と補完が不可欠である理由になっている。

別解例①

宇宙で起こる現象は人間の生活時間とは比較にならない長大な時間を要するため、私たちが捉える観測値はすでに過去の積み重ねの反映であり、出来事そのものではない。この隔たりゆえに、宇宙の理解は観測の裏側にある長期的過程を推測し補う作業を伴う。

別解例②

宇宙規模の変化は人間の経験時間を大きく超えて進行するため、観測される光やデータはその長い過程の末端に位置する情報でしかなく、出来事の全体像は直接捉えられない。この時間的距離が、宇宙を理解するには推論と構成が避けられないという事情を生む。

自己採点チェック

- ・ 「観測が間接的である」ことを示したか
- ・ データ↓意味づけの流れが明確か
- ・ 「両輪」「結合」など二項の関係性を示したか

問三

模範解答

宇宙の沈黙を前にする人間は、得られる情報が断片的で不十分であるほどに、自らの経験・文化・言語によって意味を補い、物語や概念を形成して世界を理解しようとする。その営みは、不確実性の高い状況においてこそ人間が積極的に意味生成へ向かうという、認識の根源的な特徴を示している。

別解例①

宇宙の静けさの中では、観測可能な情報が限定されるため、人間は不足した部分を想像や記憶、文化的枠組みで補おうとする。人は曖昧で確証のない事柄ほど、自ら

の物語的理解を働かせて秩序を与える傾向があり、その姿勢は不確実性に対する人間固有の認識の作法を明らかにする。

別解例②

宇宙現象は直接的に感覚へ届かない点が多いため、人間は断片的な観測を手がかりに想像や物語化を通じて不足を埋めようとする。不確実で手がかりの乏しい状況に直面したときほど、意味を創り出して理解へ向かうという人間の認知的傾向が強く働き、それが宇宙観にも反映される。

自己採点チェック

- ・ 「中心喪失の歴史」という文脈を入れたか
- ・ 自己理解の変化との因果を説明しているか
- ・ 想像力の“拡大”がどのように生じたかが具体的か

問四

模範解答

宇宙の時間は恒星誕生から銀河変形まで極端に長く、人間の生涯はその中で一瞬にすぎない。また観測にも限界が多く、沈黙の領域が常に残る。しかしその限界こそが人間を問いへと向かわせ、短い生の中で世界と関わり続ける契機となるから。

別解例①

人間には観測できない領域が広く、宇宙の時間スケールの前では生はきわめて短いが、その不完全さが問いを生み、世界との接点を増やす原動力となるため、沈黙を前に問い続ける姿勢が重要視されると筆者は述べる。

別解例②

宇宙の沈黙は人間の知識の到達範囲を常に超えるが、その隔たりがあるからこそ人は疑問を立て、限られた時間を意味づけようと努める。その営み自体が人間固有の価値であるため、筆者は問いの持続を肯定的に捉えている。

自己採点チェック

- ・ 宇宙の「長大な時間」への言及があるか
- ・ 観測限界↓問い発生の構造を明記したか
- ・ 「価値」や「意義」の根拠を論理的につないだか

問五

模範解答

筆者が宇宙の沈黙を「問いを生み出す鏡」と捉えるのは、宇宙が明確な答えを返さないからこそ、人間が世界の成り立ちや自己の位置を能動的に探ろうとする契機が生まれるためである。答えの欠如は無力さではなく、思考を開始させる余白となり、科学・哲学・文化的想像を促進する源泉となる。沈黙とは、人間の理解を拒む壁ではなく、むしろ問いをつくる力として作用し、世界と人間の関係を深める働きを持つ。

別解例①

筆者が沈黙を「問いを促す装置」として捉えるのは、宇宙が明確な言葉を与えないからこそ、人間が起源や存在の根拠を自ら探ろうとする能動的態度が引き出されるためである。答えが欠けている状態は思考を停止させるのではなく、推測や物語的理解を呼び込み、科学・文化・哲学へ広がる契機となる。沈黙は拒絶ではなく、問いを立ち上げさせる余白として機能し、人間の理解を深める場をつくる。

別解例②

筆者が宇宙の沈黙を「問いを生む場」とみなすのは、宇宙が具体的な答えを提示しないために、人間が世界の構造や自身の存在を能動的に考察する契機が生まれるからである。答えの不在は理解の放棄ではなく、推論や想像を働かせて意味を構築する余白となり、科学的探究や文化的解釈を促す。沈黙は閉ざされた壁ではなく、問いを生成し続ける力として人間の思索を支える。

自己採点チェック

- ・ 宇宙↓答えを与えない、または兆候（光・重力波・元素等）のみであること

を示したか

- 人間↓“解釈” “問いの生成”を示したか
- 両者の「往復」「相補性」を論理的に述べたか

◆全体総括

本文は「宇宙は沈黙する」という事実を出発点とし、沈黙が人間の理解を阻むのではなく、むしろ問いや意味づけを生む源泉として働くという逆説的構造を描き出している。重力波やダークマターの議論は、観測が本質的に間接的であり、データの背後にある構造を読み取る解釈が不可欠であることを示す。さらに地球中心説以降の宇宙観の変遷を踏まえ、人間は“中心の喪失”を経験しながらも、より広い視野へと想像力を開いてきた存在であることが強調される。宇宙の時間スケールは人間の生を圧倒するが、その圧倒こそが問いの価値を際立たせ、短い時間の中で世界へ意味を与えようとする人間の営為の本質を照らし出す。本文は最終的に、宇宙が答えを返さないことそのものが、人間を「問い続ける存在」として成立させるという洞察へと収束している。

【第四問】光ファイバーと人間の距離感——“見えない光”がつなぐ世界の深層

光が細い管を進んでいる——そう想像するとき、私たちはしばしばその光を“まっすぐな線”のように思い描く。だが、光ファイバーの内部で走っている光は、実際には何度も何度も微細な角度で反射しながら、ほとんど逃げ道を失うようにして前へ前へと進んでいる。コアと呼ばれる中心部と、それを取り囲むクラッドの屈折率の差が、その光を閉じ込める。この「全反射」は、光が境界に触れるたびに押し戻されることで維持される。光は逃れたいのか、留まりたいのか。私たちはそんな問いを抱くことすらないまま、日常の通信を当然のように享受している。

光ファイバーを通る光は、情報だ。だが“光になった情報”という表現は、どこか奇妙だ。声や文字、映像、感情すら伴う会話が、波長に分解され、位相や強度として符号化され、光として走る。しかもその走り方は、一直線ではない。内壁に当たりつつ、それでも失われず、微弱な損失を補いながら進む。その性質は、人間の関係にもどこか似ている。まっすぐ相手に届くと思っていた言葉が、実際には何度も反射し、屈折し、時には減衰しながら届く。光通信は技術であると同時に、人間の互いの距離の比喻にもなりうる。

光ファイバーの中を進む光は目に見えない。透明なガラスの中を、透明な光が走る。だが見えないのは光だけではない。光を送り出す側と受け取る側の端末、そしてそれらを結ぶノードやルーターが膨大な数で介在し、光の道筋を組み替え続けている。ネットワークは常に変化する“流動する地図”のようなものだ。私たちがどこかの相手に送るメッセージは、ただ二点間を結ぶ直線を往復するわけではない。無数の経路候補の中から、その瞬間最も効率の良い道を光が選び取る。まるで人が他者に辿りつく際、最短距離を歩いているようにいて、実はさまざまな回り道を経ているのと同じように。

光の速度は一定だと言われる。真空中では秒速30万キロ、ガラス中ではそれより遅くなる。それでも、私たちの日常的な感覚からすれば光は「瞬時」に届くもの

にしか思えない。だがその“瞬時性”は、光の速さそのものよりも、私たち自身の感覚的な粗さを示している。人は、距離の中にある“わずかな遅れ”を感じ取れない。1000キロ離れた友人から届いた返事と、隣室の家族の声とを、技術が介在していればほぼ同じ“距離”だと錯覚する。それは便利さをもたらす一方で、人間が本来持っていた「距離に応じて変化する関係の感覚」を鈍らせる。

光ファイバーは、距離を縮める。だが、それだけではない。距離を“均質化”する。「メートル離れた相手も、1000キロ離れた相手も、ネットワーク上ではほとんど等しく扱われる。距離の質が消える世界。そこでは、遠いことに意味がなくなり、そばににいることにも意味がなくなる。便利さの裏側で、人と人の位置関係は見えにくくなる。光が距離を消したのではなく、距離の持っていた意味を淡くしてしまったのだ。

もちろん、距離が消えることには恩恵がある。世界のどこにいても会話し、協働できる。家族や友人と離れ離れになったとしても、つながりを維持できる。しかしその一方で、「どれだけ繋がっていても孤独は消えない」という、奇妙な現象も強くなる。光の中を走る情報は、確かにつながりを作っている。だがそれは、人の身体が感じる“気配”や“温度”とは異なるつながりだ。光がいくら速くても、同じ空気を共有することには代替できない。

私たちは今、二種類の“距離”の中で生きている。一つは技術によって極度に均質化された距離。もう一つは、身体が感じる、濃淡のある距離。ネットワークの中では、人々はすべて等距離にいるように見える。だが身体は、わずかな表情や気配の違いに反応する。距離がゼロであることが、必ずしも関係の深さを意味しない。むしろ、どれだけ接続が維持されていても、互いの理解が乏しければ距離は遠くなる。

光ファイバーの技術は、物理的な距離と心理的な距離を分離した。“遠くても近い”世界を作ったが、同時に“近くても遠い”関係を生んだ。人は距離の物理的意味を手放すかわりに、心理的距離を自分で選ばなければならないようになった。か

つては地理的条件によって自然に定まっていた“届きやすさ”や“疎遠さ”が、技術によって自由になった。しかし、自由になった距離をどう扱うかという課題は、そのまま人の手に委ねられることとなった。

光ファイバーが運ぶ光は、波長ごとに分けられ、多重化され、一本の細い管の中を同時に流れる。複数の色の光が重ならないように構造化されたこの技術は、人間社会にも似ている。一つの空間の中に、多数の声や感情が流れ込む。しかし、それらはしばしば互いを打ち消したり、混線したりする。情報の過剰さは、つながりの密度を上げるどころか、理解の速度を鈍らせることすらある。光の速さで届く情報が、必ずしも光の速さで解釈されるわけではない。

さらに言えば、情報が光になって届けられるという構造は、人間に独特の“透明な共同体”をもたらしただ。見えない配線の中で情報が往来し、他者の痕跡が光として細い線を駆け抜ける。そこには一種の匿名性と、一種の親密さが同時に存在する。誰がどこにいて、どのように光を受信しているのかが、私たちにはわからない。だが、見えない配線の向こう側には確かに人間がいる。光ファイバーは、人と人をつなぐ線であると同時に、人と人の存在を“透明化”させる構造でもある。

透明であることは、時に残酷だ。見えないからこそ、相手の背景や文脈を読み損ねる。光は速いが、理解は必ずしも速くない。むしろ、光の速さに追いつけない理解が増える。瞬時に届いた情報に反応し、私たちは考える暇を奪われる。光の速度に合わせて生きる必要がないにもかかわらず、光に追い立てられるように応答してしまう。距離が縮まった副作用として、考える余白が消えていく。

光ファイバーの特徴の一つに「損失」がある。光は進むにつれて少しずつ弱まる。これは不可避だが、技術はそれを補うために増幅器を置き、信号を再生する。人間関係にも似たところがある。距離が近くても、言葉が届く過程で意味は損なわれる。相手に届く頃には、本来の意図とはわずかにずれた形になる。そのずれを埋めるのが、対話の「増幅」だ。光が弱まるのを補うように、人間も言葉の減衰を補いながら関係を維持する。

光ファイバーは、世界をつなぐ線としては奇跡的なほど効率的だ。しかしその効率性が、人間の関係をそのまま改善するわけではない。むしろ、人は“効率化された距離”の中で新しい孤独を抱える。画面越しの会話がいくら滑らかになっても、それによって消える孤独は限られている。むしろ、つながっているのに孤独であるという、新しい形の孤独が生まれる。

では、光ファイバーの世界を理解することは、人間の距離を理解することとどう結びつくのか。それは、技術が距離を均質化すればするほど、私たちは逆に“距離の質”を自分で見極めねばならないという点にある。距離とは単に物理的な隔たりではなく、相手への理解の深さ、関係の成熟度、語りの共有度を示す概念となる。技術に距離を消されることで、距離の意味はむしろ浮き彫りになる。

光ファイバーの内部は、無音だ。光が走っても、そこには音はない。人間の言葉が光になるとき、声は消える。だが、声が消えても、意味が失われるわけではない。むしろ音が消えることで、言葉の裸の形が露わになる。声に含まれていた揺らぎや震えが取り除かれた、純粋な情報の形。その情報が、再び人間の身体に戻ってくるとき、意味は再構築される。光の世界と身体の世界の往復の中で、意味は無数の変換を受けながら、ようやく相手に届く。

光ファイバーは、距離を通過する光のために作られた道だ。しかし、その道に光を通すのは人間であり、それを解釈するのも人間だ。結局のところ、どれだけ技術が進んでも、距離の“意味”は人間が決める。光がいかに均質な速度で走ろうと、人と人の関係は均質化されない。距離は単に長さではなく、関係の深さを映す鏡である。

光ファイバーの世界を理解することは、人間の距離を理解することでもある。光は見えない線となり、世界をつなぎ、人間の関係を変えた。だがその光が投げかける問いは、いつも人間に返ってくる。「あなたは、どの距離を大切にするのか」。光が走るその先にあるのは、結局のところ人であり、人の選ぶ距離なのだ。

設問

問一（120字程度）

本文では、光ファイバー内部の光の挙動と人間のコミュニケーションが重ねられている。筆者はこの比喻をどのように捉えているのか。本文の内容に即して説明しなさい。

問二（140字程度）

筆者は「距離の均質化」という現象をどのように評価しているか。肯定と否定が混在する本文の記述を踏まえつつ、その理由を説明しなさい。

問三（150字程度）

本文では「光の速度に追いつけない理解」という逆説的な指摘がある。この指摘が示している人間の認知的特徴について、本文の論旨に沿って説明しなさい。

問四（180字程度）

筆者は、光ファイバーが生む「透明な共同体」におけるつながりをどのように捉えているか。その利点と問題点の双方に触れながら説明しなさい。

問五（200字程度）

本文終盤に示された「距離の意味を人間が決める」という主張は、本文全体の議論におけるどのような結論に位置づけられるか。「距離」「理解」「つながり」の関係を踏まえて説明しなさい。

解答・解説

問一

模範解答

筆者は、光が全反射を繰り返しながら進む構造を、人間の言葉が相手に届くまでに生じる反射や減衰の比喻として捉え、直線的に届くと思われる情報が実際には屈折や補いを経て伝わる点を強調し、通信技術が人間関係の特性を映していると示している。

別解例①

筆者は、光が透明な管内で屈折しつつ進む姿を、人間の対話が相手へ届く際に不可避のズレや弱まりを伴う構造になぞらえ、情報伝達の効率性が必ずしも理解の直線性を保証しない点を示し、通信技術の仕組みが関係の難しさを照らすと述べている。

別解例②

筆者は、光が閉じ込められながら進む過程を、人の言葉が相手へ届く際に反射や減衰を経験する過程に重ね、情報の伝達が単純な直線ではなく補填や再構成を伴う点を強調し、技術に支えられたコミュニケーションが関係の複雑さを映し出すと論じている。

自己採点チェックリスト

- ・ 光の「全反射」や「屈折」を人間の言葉の届き方の比喻として説明できているか
- ・ 直線では届かない／反射・減衰を伴うという点が本文に即して述べられているか
- ・ 「技術 ↓ 関係の性質を映す」という筆者の主張をきちんと盛り込んでいるか
- ・ 比喻の方向性（光 ↓ 言葉）が逆転していないか
- ・ 「効率 ≡ 理解ではない」というニュアンスを含んでいるか

問二

模範解答

筆者は距離の均質化に利便性を認めつつも、地理的差異が意味を失うことで関係の濃淡が捉えにくくなる危うさを指摘する。遠くても近く感じられる恩恵と、近くても遠く感じ得る新たな孤独が生じる点を挙げ、技術が距離を消すほど人は心理的距離を自ら選び取らねばならない状況に置かれると述べている。

別解例①

筆者は距離の均質化が生活の利便を高める一方で、人間関係に本来備わっていた地理的手がかりを失わせ、距離の質を判断しにくくする問題を強調する。接続が容易になっても心理的隔たりは残り、むしろ新しい孤独を生む可能性があり、技術の恩恵を受けつつも関係の距離は自ら再定義する必要があると述べる。

別解例②

筆者は距離の均質化が交流を容易にし生活圏を広げる利点を認めながらも、物理的距離が持っていた関係の指標が曖昧化し、近さと遠さの実感が揺らぐ危険を指摘する。光通信が地理的差異を消すほど、心理的距離を自覚的に扱う必要が生じ、利便の裏に新たな孤独が潜むと論じている。

自己採点チェックリスト

- ・ 「距離が均質化する＝物理的距離の意味が弱まる」という説明ができていますか
- ・ 利点と問題点の両方に必ず触れているか
- ・ 闇雲に肯定・否定ではなく、筆者の二面性の視点を反映しているか
- ・ 「新しい孤独」「心理的距離を選ぶ必要」など本文の核を盛り込んでいるか
- ・ 「距離の意味の喪失→再構築」という因果が明確か

問三

模範解答

筆者の指摘は、情報が光の速さで届く環境においても、人間の理解はその速度に即応せず、解釈や熟考のための時間を必要とするという認知的限界を示す。瞬時の応答が求められる状況では、情報が過剰になりかえって理解が浅くなる危険があり、人は光の速度ではなく自身の思考速度で意味を再構成する必要があるという点を示唆している。

別解例①

筆者は、通信が高速化しても思考は物理的速度に従わず、理解には独自の時間が要するという人間の認知特性を強調する。即時性が高まるほど熟考の余白が奪われ、情報に反応すること自体が目的化してしまう危険があるとし、人は光の速さではなく自身の内的リズムに即して意味を形成すると述べている。

別解例②

筆者は、光通信の高速性が人の理解を自動的に速めるわけではなく、情報を解釈するには固有の思考の時間が不可欠である点を示す。即応性の高さがむしろ認知を混乱させ、浅い理解を生じさせる危険を指摘し、理解は物理的速度と無関係に人間固有のペースでしか深まらないという認知的特徴を明らかにしている。

自己採点チェックリスト

- ・ 「光の速さ」と「理解の速さ」を対比できているか
- ・ 即時性が理解を妨げるという逆説を本文に沿って説明できたか
- ・ 「熟考の余白が奪われる」という具体的表現を含んでいるか
- ・ 認知の限界と、その背景の心理学的理由（思考の時間）が説明されているか
- ・ 「人は自分のリズムで理解する」という筆者の核心が押さえられているか

問四

模範解答

筆者は、光ファイバーが形成する透明な共同体を、見えない形で人々を結ぶ仕組みとして評価しつつも、その匿名性と文脈の欠如が誤解や孤立を招く危険を指摘する。

情報が光として往来する環境では相手の背景が見えにくく、つながりが保たれていても理解が深まるとは限らない。筆者は、この利便と不透明さの併存こそが現代的つながりの特徴であり、技術が支える関係には慎重な解釈が求められると論じている。

別解例①

筆者は、光通信による透明な共同体が距離を越えた接続を可能にしつつも、相手の存在を“痕跡”としてしか把握できないため理解が浅くなる危険を指摘する。匿名性が高い環境では誤読や断絶が生じやすく、つながりの継続が必ずしも関係の成熟を意味しない。筆者は、この利便と脆弱性が共存する状況を現代的関係の特徴と捉え、技術に依存したつながりには注意深い読み取りが必要だと述べている。

別解例②

筆者は、光ファイバーが生む透明な共同体を、多様な人を距離なく結びつける利点として評価しながらも、その背後で相手の文脈が不可視となり誤解が起こりやすい点を問題視する。光による接続は関係を継続させるが、理解の深さを保証しないため、つながっていても孤独が残る可能性を示し、この利便性と脆弱性の併存に注意を促している。

自己採点チェックリスト

- ・ 「透明な共同体」という言葉の意味内容を正確に扱っているか
- ・ 利点（距離を越える）と問題点（文脈の欠如／誤読）を両方書いているか
- ・ 「痕跡としての他者」という本文の重要概念が含まれているか
- ・ 技術による“つながりの弱さ”がどう生じるか説明できているか
- ・ 利便と脆弱性の併存という筆者の中心主張が拾えているか

問五

模範解答

筆者は、技術が物理的距離を均質化した結果、距離の“意味”を人間自身が再構成

する必要が生じたという結論を示す。光通信が関係の位置関係を曖昧にするほど、近さや遠さは物理的長さではなく、理解の深さや関係の成熟度によって決まる概念へ変化する。筆者は、距離が消えることでむしろ心理的距離を能動的に扱う重要性が浮かび上がり、つながりの質は技術ではなく人の判断によって形づくられるという最終的な視点を提示している。

別解例①

筆者は、光通信が距離を均質化することで、人間が心理的距離を自覚的に選び取り、再定義する必要が生まれたという結論に至る。距離は物理的隔たりではなく、関係の理解度や相手への関心の濃淡を示す指標へ転換し、技術が近さを作っても深い理解は自発的な働きによってのみ成立する。筆者は、距離の意味が技術によって削ぎ落とされるほど、人が自ら距離を構築する責任が強まると論じている。

別解例②

筆者は、技術が地理的距離の意味を弱めたことで、距離を関係の深さとして捉え直す必要が生じたと結論づける。光通信は近さを形だけ保証するが、理解の密度や語りの共有度は技術とは無関係に人間の判断に依存するため、距離は心理的要素へと再編される。筆者は、距離を決める主体が技術ではなく人である点を強調し、つながりの本質は能動的な理解の働きにこそ宿ると述べている。

自己採点チェックリスト

- ・ 「距離の意味の再構成」という結論を本文の最終点として説明できているか
- ・ 距離⇨物理⇨心理（理解／成熟度）という概念変化を捉えているか
- ・ 「技術が距離を消す⇨人が距離を決める」という因果が明確か
- ・ **主体性（人間側の判断）**というキーワードをきちんと含んでいるか
- ・ 本文全体の議論（距離／理解／つながり）を総合できているか

◆全体総括

第四問は、光ファイバーという技術的対象を通して、「距離とは何か」「つながる

とは何か」という人間関係の根源的問題を読み解く章となった。

光通信は距離を消すが、理解は距離を消さない。むしろ、距離の意味が薄れた時代だからこそ、人は心理的距離や関係の深さを自ら選び、構築し、調整しなければならぬ。この章は、読解の抽象度を一段階引き上げるだけでなく、技術と人間の関係を問い直すという現代的テーマを扱い、最終章に向けた「深い思考の土台」をつくる役割を果たしている。

【第五問】手触りの哲学 ― 技術時代における身体感覚

近年、何かを「触る」機会が極端に少なくなった、とふと思うことがある。視界に映るものの多くはガラス越しに操作され、あるいは指先にわずかな抵抗を残すだけの平らな表面として存在する。スマートフォン画面を押し込んでも、そこには“押した”という確かな実感は返ってこない。コンピュータは、私たちの日常の操作をすべて単なる信号へ還元し、触覚の起伏を削ぎ落としてしまう。ここ数十年で広がった、この静かだが徹底した変化は、気づかぬうちに人の思考の質すら変容させつつあるように思える。

たとえば、古い家の修繕をしている大工の手つきを想像してみる。彼らは木の節を撫でただけで、その部分が将来どのように動くか、湿気を吸ってどれほど歪むかを読み取る。ノコギリの刃が木材に食い込むときの音のわずかな違いから、内部の繊維の流れを察する。そこには、長年の経験が蓄積された身体的知性がある。身体は、視覚よりもはるかに複雑で速い「判断装置」として働いているのだ。彫刻家や陶芸家、あるいは料理人もまた、同じように“触れることで世界を理解する”存在だ。粘土の湿り気の変化、包丁が食材の繊維を断つときの抵抗、湯気の温度の差。それらはすべて、視覚情報以上に精密で、思考と直結した情報の束である。触れるという行為を通して、人間は世界へ密着し、そこで起こる微細な変化を「感じる」と「理解すること」の区別なく受け取っている。

一方で、技術はこの“密着”を次第に外してきた。リモート操作、オンライン会議、デジタルファブリケーション――これらの仕組みは利便性をもたらすと同時に、身体と世界の間に薄い膜を敷いてしまう。遠隔地でロボットアームを操作する研究者たちは、操作盤に返ってくるわずかな振動や圧力の変化を注視しているという。だがどんなに技術が進んでも、「触れている」という生の感覚を完全に再現することは難しい。触覚には、圧力や熱だけでなく、表面の粗さ、質量、動きの予兆など、数えきれない要素が重なっている。身体の触覚系は、単一のセンサーではなく、皮

膚・筋肉・関節・神経が一体となって働く複雑な総合機構である。それを“データ化された触覚”として再現しようとする、どうしても情報は薄くなる。

こうした「薄さ」は日常にも広がっている。食材は工場で均一化され、表面を触って状態を判断する必要は減った。写真アプリは指先での“つまむ”動作を認識するが、その指の間には何も挟まれていない。地図アプリは道の傾斜や建物の質感を伝えない。画面に映る世界は、実際の世界よりもはるかに軽く、平らで、こぼれ落ちるような不確かさを持つ。便利さと引き換えに、私たちは世界の“重さ”を手放しつつあるのかもしれない。

もちろん、技術発展そのものを否定したいわけではない。むしろ、技術は私たちの身体を新たな形で拡張する力を持っている。古代人にとって、火を扱う技術は身体能力を劇的に広げた。近代の機械工具は腕力を拡張し、乗り物は移動能力を拡大した。そして現代の情報技術は、認知領域を広げている。技術哲学者たちは、こうした現象を「身体の外への認知の拡張 (extended mind)」と呼ぶ。つまり、人間は道具を使うことで、頭の中だけでは処理できない情報を、外の世界に預けているのだ。メモ帳は記憶の拡張であり、計算機は思考の助けであり、地図アプリは空間認識を補強する。“身体を外側に伸ばす”行為として、技術は人間には不可欠である。

しかし、技術の抽象化が進む現代では、この拡張が「身体存在感の減衰」と紙一重になりつつある。触覚を使わないまま世界を理解することに慣れすぎると、判断そのものが薄まっていく。たとえば料理の工程で、湯の沸騰音の変化や味噌の溶け具合を確かめず、完全にタイマーとレシピアプリだけに頼ったとき、結果は確かに食べられるものにはなる。けれどその料理を「作った」と胸を張れるかどうかは、また別の問題だ。身体を通して判断した時間と温度は、道具の内部に記録されない。身体が得た経験はデータでは置換されず、記憶として蓄積されていく。そこに、技術がまだ触れていない領域がある。

身体感覚は、単なる感覚器の働きではない。身体は、世界の情報を取り込み、そ

れを思考へと変える“媒介”でもある。たとえば陶芸家が土を触るとき、手が得ている情報は触覚だけではない。湿度、粘り気、温度、回転の速度……それらを総合して“いまこの土が何を求めているか”を判断する。ここには、論理的な推論よりも速く、しかも深い、身体的解釈が働いている。ある研究によれば、触覚を伴う作業を行っているとき、脳の活動は「自己と外界の境界」に関わる領域で活発になるという。つまり、触れるという行為は、世界と自分との境界を確認し直すプロセスでもあるのだ。

技術が進めば進むほど、この境界は曖昧に、あるいは広がりすぎてしまう危険もある。オンラインゲームの仮想空間では、身体は座ったまま、視覚だけで遠くへ移動する。VRで触覚フィードバックが加われば、身体は「あるはずのない触覚」を感じたと錯覚する。遠隔操作ロボットは人間の腕の延長となり、災害現場での救助を可能にする。こうした技術は、人間の身体を“新たな場所へ”拡張するが、同時に、世界へ触れることの意味を変えていく。触れているのか、触っていないのか、その境界が揺らぎはじめる。この揺らぎをどう扱うかが、これからの時代の大きな課題である。

思えば、人間が世界を理解してきた歴史は、身体感覚とともに進んできた。狩猟採集の時代、森の匂いや地面の傾き、風の湿り気は、生きるための判断材料だった。農耕社会では、土の粒子の細かさで土地の肥沃さを測り、職人は素材の質を手触りで見抜いた。これらの情報は、視覚だけでは捉えきれない。むしろ身体の深部で判断が行われていた。身体で速度で考えるということは、人間に本来備わっている時間感覚や、世界との距離感を取り戻すこともある。

現代の技術は、私たちの思考を高速化し、膨大な情報を即座に行き交わせるようにした。しかし、その速度に身体が追いついていないことを、どこかで感じてはいないだろうか。通知音が鳴るたびに思考が分断され、画面を滑る指先はつねに“追われる速度”で動かされる。ここには、身体の手と技術の速度のズレがある。このズレが積み重なると、人は次第に「自分は世界を把握できていないのではないか」

という不安を抱くようになる。本来、触覚は世界とのつながりを確認するための大切な基盤であつたはずなのに、その基盤が薄くなるほど、心は不安定になる。

では、技術時代において、身体感覚はどのように生き残るのだろうか。ある陶芸家は、「土に触れていると、自分のリズムを取り戻す」と語る。ある料理研究家は「包丁の重さが、思考の重さにつながる」と言う。これは単なる感情的な言い回しではなく、身体で判断を行う作業が、人間の認知に深く関わっている証拠だ。触れる行為は、世界の複雑さと向き合うための“個人的な足場”となる。どれほど技術が進んでも、この足場が失われることはない。むしろ技術が進めば進むほど、この足場の価値は高まる。

身体は、世界を測る最初の道具であり、そして最後に残る道具でもある。技術が世界を平らにしていくとき、手触りは世界の凹凸を再び思い出させる。触れることでしか得られない情報があり、その情報は思考の深さを形づくる。身体感覚は、過去の遺物ではなく、これからの時代を生きるための“基底”なのだ。技術の速度に合わせて身体を置き去りにするのではなく、身体に速度に技術をどう寄り添わせるか――それが、これからの世界を考えるうえで避けては通れない問いとなるだろう。

手触りを取り戻すことは、世界をもう一度“確かめる”ことでもある。世界の複雑な質感を、ただ画面越しに眺めるのではなく、身体を通して理解し直す。技術が発展し続ける未来のなかでこそ、手触りは人間にとってかけがえない指標になる。触れることは、世界の存在を赦し、自分自身の存在を確かめる行為である。その意味で、身体感覚は、技術の時代を生きるためのもっとも古くて新しい“哲学”なのだ。

設問

問一（70 字程度）

本文において筆者は、デジタル技術の進展による「薄さ」に言及している。この「薄さ」が何を指し、どのような問題を含むのか、本文の前半部分の論点に基づき70字程度で説明せよ。

問二（120 字程度）

本文では、職人や料理人の例を挙げながら「身体的知性」の働きが述べられている。筆者がこれらの例を通して示そうとしている、触覚の持つ認識上の重要性を120字程度で説明せよ。

問三（150 字程度）

本文は、技術の発展による「身体と世界の境界の揺らぎ」を多角的に論じている。筆者が示すその“揺らぎ”とは何であり、それが人間の世界理解にどのような変化をもたらすと考えられているのか、本文に即して150字程度で説明せよ。

問四（170 字程度）

本文では「身体と技術の速度のズレ」が不安定さを生むと論じられている。筆者の議論をふまえて、なぜこのズレが人間に不安をもたらすのか、その背景とメカニズムを170字程度で説明せよ。

問五（250 字程度）

本文の結論部分では、「手触りを取り戻すことは世界を確かめることだ」という主張が述べられている。本文全体を踏まえ、

- なぜ触覚が世界理解の基盤とされるのか
- 技術時代においてこの基盤がどのような価値を持つと筆者は考えるか

の二点を必ず盛り込み、250字程度で論じよ。

解答・解説

問一

模範解答

デジタル操作の画面化が、触覚を介した判断や素材の質感を失わせ、世界との密着感を薄めてしまう点を指し、その結果思考や理解が軽く不安定になる問題を含む。

別解例①

デジタル化が手触りや抵抗といった身体的情報を欠落させることで、世界の厚みが知覚から消え、判断の深さが衰える危険を含む点が「薄さ」として批判されている。

別解例②

画面中心の作業が感触・重さ・温度といった多層的情報を遮断し、人が世界の実在感をつかみにくくすることで、理解や認知が浅く揺らぎやすくなる点を示している。

自己採点チェック

- ・ 「触覚が失われる」という現象を明確に書いたか
- ・ 「世界との密着感・実在感が減る」点を説明できているか
- ・ 「判断の浅さ・不安定さ」といった問題点を述べたか
- ・ 抽象的な言い換えではなく、本文に基づく説明になっているか

問二

模範解答

職人や料理人が素材の湿度や抵抗を瞬時に読み取るように、触覚は多層の情報を統合して判断する高速で深い知性として働く。筆者はこの例を通じ、触れる行為が思考と不可分であり、身体が世界理解の基盤として機能していることを示している。

別解例①

大工や陶芸家が僅差の変化を手で感じ取るように、触覚は視覚以上の密度で素材の状態を把握し、判断を導く。筆者はこの例を用いて、身体的知性が知覚と解釈を同時に行う装置であり、触れることが理解の核心にあると強調している。

別解例②

包丁の重さや粘土の粘りの変化から状況を即座に解釈するように、触覚は情報処理と判断の一体化を担う高度な知性である。筆者はこれらの例によって、触れる経験が思考の深部を形づくり、世界認識を支える根源的な働きを持つと説いている。

自己採点チェック

- ・ 「職人や料理人の例」を具体的に引用して説明しているか
- ・ 触覚が「視覚以上の情報密度」「統合判断」を行う点が書けているか
- ・ 「触覚＝思考の基盤」という筆者の結論まで触れているか
- ・ 単なる感想ではなく“役割の説明”として成立しているか

問三

模範解答

筆者が言う“境界の揺らぎ”とは、遠隔操作やVRによって「触れていないのに触れたと感じる」「触れているのに実体がない」といった身体と世界の関係が曖昧化する現象である。この揺らぎは、世界を身体で捉える基盤を弱め、人が実在を確かめる感覚を失い、理解の方法そのものを変質させる危険をもつと論じられている。

別解例①

筆者のいう揺らぎとは、仮想的触覚や遠隔的触れ方が広まり、身体が世界のどこに位置づくか判断しにくくなる状態である。触覚と実体との対応が崩れることで、世界の重さや距離を測る基盤が弱まり、人の認識も“身体に根ざした確かさ”を欠き、理解の枠組みが不安定化する点に危うさがあると述べられている。

別解例②

揺らぎとは、触覚が実際の接触と切り離され、仮想的刺激や遠隔操作が“身体の外側の手”を作り出すことで、身体と世界の境界線が不確定になる現象を指す。これにより、世界との接触感が薄れ、人が何を実在として把握するかが揺れ始め、従来

の身体依拠の理解様式が崩れる危険が示されている。

自己採点チェック

- ・ 「揺らぎ」が“身体と世界の境界の曖昧化”であることを書けたか
- ・ VR・遠隔操作など本文の具体例に基づく説明か
- ・ 「世界理解がどう変質するか」を論理的に述べているか
- ・ 単に“危険だ”と書くだけでなく、その理由を示せているか

問四

模範解答

身体はゆっくり触れ、材質や重さを確かめる固有の速度で判断するが、技術は通知や即時処理によって高速の応答を求める。この二つの速度差が積み重なると、人は「自分の理解が追いついていない」という感覚を抱き、世界把握の足場が揺らぐ。身体が世界に触れて確認する過程が省略されるため、思考が断続的に中断され、判断の一貫性が失われ、不安が生じると筆者は述べている。

別解例①

身体は抵抗や温度といった多層の情報を時間をかけて統合するのに対し、技術は瞬時の反応と連続した流れを前提にする。この速度差は、身体的確認の過程を圧縮し、判断の基盤を薄めるため、人は理解の遅れを自己の欠陥と誤認しやすくなる。結果として、世界を把握する手応えが失われ、思考の連続性が損なわれ、不安感が高まると筆者は指摘する。

別解例②

身体は触覚や筋感覚を通じて段階的に状況を理解するが、技術は即時の操作と情報更新によって“急がされた思考”を生む。この不一致が続くと、身体的確認が間に合わず、人は現実への結びつきを弱め、判断の根拠を見失う。結果として「理解が空回りしている」ような感覚が生じ、自己の把握能力への不信や不安が増大する、と筆者は論じている。

自己採点チェック

- ・ 「身体速度」と「技術速度」を対比して説明したか
- ・ 速度差が「理解の遅れ」や「判断の不安定化」を生む理由を書けたか
- ・ 本文の因果構造（速度差↓足場喪失↓不安）に従っているか
- ・ 抽象的な精神論でなく、身体の働きに根ざした説明になっているか

問五

模範解答

筆者は、触覚が世界の実在を確かめるもっとも根源的な手段であり、人間が世界との境界を引き直す基盤であると述べる。触覚は素材の重さや抵抗を身体速度で受け取り、理解の足場を形づくる。技術時代では、画面越しの操作や遠隔的な接触が増え、世界の質感が“薄く”感じられがちだが、むしろその環境下でこそ手触りは重要性を増す。身体に備わる固有の判断力は技術では代替できず、触れる行為は世界を再確認し、自分の思考を落ち着かせる役割を果たす。筆者はこの点に、手触りを取り戻すべき理由を見いだしている。

別解例①

触覚は、視覚では掬いきれない重さ・温度・抵抗の情報を身体内部で統合し、人間が世界の実在を確かめる基盤となる。筆者は、身体的判断は論理以前に働く理解の装置であり、技術が抽象化を進めるほど、その役割がむしろ露わになると論じる。遠隔操作や仮想空間では、触覚と実体がずれるため、世界とのつながりが不確かになりやすい。だからこそ触れる行為は、世界を測る“最後の足場”として価値を持つ。手触りは、技術時代に生じる不安定さを補い、思考を現実へ確かにつなぎ直す働きを持つとされる。

別解例②

筆者によれば、触覚は身体と世界の境界を形づくる根源的な知覚であり、世界の複雑な質感を身体速度で受け取って統合する能力を持つ。技術が情報を平坦化し、

操作を“触れない行為”へ置き換えるほど、人は世界の重さを感じにくくなり、理解の拠点を失いやすい。こうした時代だからこそ、触れる行為は、自分がどこに立っているかを確かめる身体的基準として機能する。手触りは、技術が生む抽象化の圧力を和らげ、世界との結びつきを回復する要となり、身体感覚の価値を再確認させる。

自己採点チェック

- ・ 「触覚Ⅱ世界理解の基盤」という説明が必ず盛り込まれているか
- ・ 技術時代における“基盤の価値の増大”を述べているか
- ・ 世界の“实在”や“質感”との結びつきに触れたか
- ・ 二点指定（触覚の基盤性／技術時代の価値）を両方満たしているか
- ・ 本文終盤の議論（足場・再確認・不安定さの補填）を反映しているか

◆全体総括

本問は、デジタル化が進む現代で「触れること」がいかに人間の世界理解を支える根源的な働きをもつかを明らかにしている。筆者はまず、画面操作に代表されるデジタル環境が、重さ・抵抗・温度といった触覚情報を奪い、世界を“薄く”感じさせる危うさを指摘する。これは単なる感覚の変化ではなく、世界との接続を確認する基盤が弱まるという認識上の問題でもある。

次に、職人・陶芸家・料理人などの例を通して、触覚が単なる感触ではなく、素材の状態を瞬時に読み取る“身体的知性”として働いていることが示される。触れる行為は、思考の前段階で情報を統合し、世界の複雑さをそのまま受け取るための深い判断装置である。

さらに筆者は、遠隔操作やVRがもたらす「身体と世界の境界の揺らぎ」を描き、触覚が実体から切り離されることで、何を実在として把握するかが揺れやすくなると論じる。この揺らぎは、技術が生む即時性と身体固有の速度とのズレを加速させ、人が「理解が追いつかない」という不安を抱く背景にもなる。

結論として筆者は、手触りの回復こそ技術時代の認識を安定させる鍵だと述べる。触覚は世界の実在を確かめ、自分の位置を取り戻すための“最後の足場”であり、技術が進むほどその価値は際立つ。触れることは、世界を具体的に感じ直し、人間としての理解の基盤を支え直す行為にほかならない。

おわりに

今回もここまでお疲れ様でした！ 前回の記述式問題集よりも文字数を増やし、答える側の考察の幅や言葉選びの選択肢などを拡大してみたつもりです。もちろん解答にあたっては本文で使われていた文言や文章を適宜参照したり、導入したりすることが必要となりますが、そのうえであなたが自分なりに理解したことを丁寧に言葉にしていくことが大切ですね。

嬉しいことなのですが、前回の記述問題特化篇に取り組んでくれた生徒さんが、分かりやすく他者に説明する練習として現代文はちょうどいいというお話をしてくれました。現代文の問題に取り組むとき、本文を読んで内容は理解できるのだけでも、設問で問われるとどのような表現で解答すべきか悩むことは数多くあります。その場面で練磨されている能力のひとつには、まさにこの生徒さんが語ってくれたような能力も確実に含まれているはずです。（他には忍耐力や腕力でしょうか？笑）この問題集はサクサクやるためには作られていません。反対に、とても悩んで、放り投げそうになって、文章にできたりできなかったりする自分の様子も含めて味わいつつ、解答例を眺めてツツコミを入れたり、別な考え方もあるはずだと思いを巡らせたりすることが主眼です。

ぜひ気軽にじっくりとチャレンジしてみてくださいね☆